

地図帳の怪

—— 中国地名のカタカナ表記の功罪 ——

明 木 茂 夫

一、はじめに — 「マスツォン」って誰？

先日のFM放送のクラシック音楽の時間に、中国のバイオリニスト・リュウウェイのリサイタルが放送された⁽¹⁾。その中で司会の戸田紗織氏が演奏曲目の中国人作曲家を「マスツォン」と紹介されていた。これでも中国の有名な現代作曲家の名前はいくらか知っているつもりだが、この「マスツォン」が誰のことなのか思い至るには些か時間がかかった。それもそのはず。戸田氏はこの人名を「マス・ツォン」と「マス」で区切って読んだばかりか、この「ス」を子音の「s」のように軽く、つまり「マス・ツォン」という感じで読まれたからである。「マス・ツォン」とはとう考えても中国人の名前らしくない。

この「マスツォン」、実は中国の有名な作曲家「馬思聰⁽²⁾」のことである。もちろん馬が姓、思聰が名であるから、「マ・スツォン」と切るべきであり、さらに中国語の発音に近いカタカナ表記ならば「マー・スーツォン」と書くべきである。もしも放送原稿が「マー・スーツォン」と表記してあれば戸田氏も「マス・ツォン」などとは読まなかったであろうし、「マー・スーツォン」という感じで読まれたればそれが「馬思聰」であることはまだしも認識可能だったことであろう。このリサイタルのメイン曲目の作曲家の名前がこのように粗雑に扱われたことに憤りさえ覚える。中国人の名前など誰のことか分からなくてもかまわない、とでも言うのか。もしも一般の人がこの放送を聴き、いい曲だなと思ってCDを探そうとしても、これでは全く役に立たない。もちろん中国語のおできにならない戸田氏ばかりを責めるつもりは全くない。全ての責任は「マスツォン」などという似て非なるカタカナ表記をした人間にある。

さらに念のため、この放送の内容を雑誌『FM Club』のこの日のFM番組表で確認してみた⁽³⁾。番組表では「マスツォン」ではなく

マー・スーツォン

と表記されている。こちらの方がよほどよい。さらに同じ号の番組内容紹介欄「NHK-FMプログラム・ガイド」では

馬思聡（マー・スツォン）

と漢字表記でカタカナは（ ） 入りになっている。これはもっとよい。漢字があれば格段にイメージがつかみやすいし、なにより検索が可能である。但し、「スー」ではなく「ス」となっているのはよろしくない。「マー」と「スー」はそれぞれ同じ長さの一音節である。表記を変えるべきではない。それにしても放送も番組表も、なんとまあ不統一なことだろう。音読みで「ま・しそう」（ば・しそう）ではなぜだめなのか。

少々不正確でもいいから「現地音」で読む方が中国に親しみが持てていい、という意見も感情論としてはあり得る。しかし時と場合でランダムに表記が変わる（つまり表記法が確定されていない）カナ表記では情報としては役に立たない。検索ができないのである。それに感情論からしても、天国の「馬思聡」は自分のことを「マ・ス・ツォン」などと呼んでもらってもあまり嬉しくないのではないか。

反対に日本人の人名は、中国では中国音で読まれる。私事で恐縮だが、私はあちらでは常に「明木」と呼ばれる。それに対して、私は日本人なんだからあくまで日本語音で呼んで欲しい、という感情は私はずいぞ持ったことがない。留学中友人から「ミンムウさん、あなたの名前は日本語では何と発音するのか」と聞かれたことがある。「あーけーぎ」とゆっくり教えると、

「あーちえーちー、ですか？」

「え？ あーきえーちー、ですか？」

何度教えても、とうとう正しく発音してくれなかった。でもこれは仕方がないのである。「ケ」や「キ」という音節は中国語には存在しない。外来語の「キ」の音が「チ」に置き換えられるのは中国人には自然なことだ。「チャイコフスキー」は中国語では「……スチー」となる。

小論で論じたいことは、このように世間に行われている中国語のカナ表記の合理性についてである。マスコミにはマスコミの表記の取り決めがあるのだから、小論ではそこまでは踏み込まない。中国への親しみ、などの感情面もひとまず置いておく。中国語の学習経験のない一般の人々が中国の固有名詞を目にする場合、漢字で書き日本語で読む、漢字で書きカタカナ中国語音で読む、カタカナ中国語音で書き且つ読む、といったやり方があり得るが、中国地名や人名を認識する上でそれぞれどのような得失があるかを考察してみたい。その材料としてここでは社会科の地理の教材として広く用いられている「地図帳」の中国地名表記を取り上げてみることにする。放送や新聞での表記はまた別問題であるし、それらを全てモニターするのは困難である。またマスコミ各社による方針の違いという問題もあろう。ここでこうした問題を考える材料として「地図帳」というものを選んだのは、対象として調査範囲が限定的で明確であること、後述するように表記法が一つのシステムとして一応完結していること、それに社会面・教育面で影響力が大きいことなどを考慮に入れた結果である。ここでは特に帝国書院発行の『新詳高等地図』(以下特に断らない

限り単に「地図帳」と言う)を主たる調査対象とし、二宮書店発行の『高等地図帳』(以下『二宮書店版』と言う)も適宜参照した。

二、拼音―カタカナ対応一覧表の作成

さてそうした視点で改めて地図帳を見直してみると、やはり違和感は否めない。地図帳では巻末の凡例に「1、地名の表記」として次のようにある。

原則として、日本語による表記も、欧文による表記も現地語音を取り入れている。⁷⁾

この原則により、中国の地名表示は全てカタカナ現地音が主、漢字表記は従で()入りとなっている。ざっと見回しただけでも「チンチョウ」「チヨンチョウ」「チャンチョウ」「ツァンチョウ」「チャオチョウ」と大変紛らわしい。また「カイロワン」「リウチャシヤ」も一見しただけではどこで切って読むかさえ分かるまい。「カイロワン」は「開羅」、つまり「カイ・ロワン」なのだが「カイロ・ワン」と切る人もいそうだ。「リウチャシヤ」は「劉家峽」、つまり「リウ・チャ・シヤ」である。これなら「リウチャーシヤ」と書く方が分かりやすいように思うが、実はそうはいかないのである。理由はこれから述べる。

そもそも中国語をカタカナで表す場合、「声調(四声)」については別に記号を使わない限りは表記不可能であり、また教育向け・一般向けの資料には必要ないことであろう。また「n」と「ng」はどちらも「ン」であるが、これも致し方ないことで、また「n」と「ng」を区別せず「ン」と表記することは、一般的な「唐音」の特徴でもある。書籍によっては「n」を「ン」、「ng」を「ん」と工夫しているものもあるが、「n」「ng」の発音の区別ができる人には納得できる表記だとしても、それを知らない人が「ン」と「ん」から実際の音声をイメージできるとも思えず、一般的な方法とはなり得まい。また片仮名と平仮名が表記上混在してしまう不利もある。

さてそこで重要なのは、この地図帳のカタカナが中国語を実際に耳で聞いた「感じ」をその都度直感的に書き表したものか、実際の発音を知らないまま中国語のローマ字綴りを適当に読んだものか、それとも中国語学的な根拠に基づいて系統的に表記されたものなのか、ということである。一つ例を挙げてみよう。広東省の「チャンチャン」である。よく見ると前の「チャン」は拗音の小さい「ャ」で、後の「チャン」は通常の大きい「ヤ」で表記されていることが分かる。

(漢字表記) (拼音表記)⁸⁾ (カタカナ表記) (日本漢字音)

湛江 zhan jiang チャンチャン たんこう

「湛」の字は「an」韻母で「江」の字は「iang」韻母。どうもこれに合わせて小さい「ャ」と大きい「ヤ」を意識的に書き分けているようであ

る。こうした「ヤ」と「ャ」の書き分けは他の音節にも全て及んでいる。これは語学的にはi介音（齊齒呼）の場合は大い「ヤ」と使う、と言っ
てよいだろう。先ほどの「劉家峽」を「リューチャーシャ」と書けない理由もここにある。この原則からは「リウ・チャ・シャ」と書くしかない
のだ。

実際に地図帳を利用する人がそこまで気づくかどうか、またこうした書き分けによってどこまで正確な中国語発音に近づけるかはまた別問題で
あるが、i介音の「iang」は単音節で見る限り「チャン」よりも「チャン」の方が実際の音声に近いことは事実であるし、またそうした音声面
以外に、原語の音節を区別するためのファクターをできるだけ増やしておくという点からも、意味のあることではあろう。この一事を以てしても
このカタカナ転写が中国語学の知識を持った人により系統的になされたことを十分窺わせる。

ではこの地図帳式カタカナはどのような仕組みで作られているのかを検証してみよう。手順としては、地図上の地名のカタカナを全てサンプル
として採取し、これを実際の中国語の発音に照らし合わせて、拼音ローマ字による音節に対応させて整理・配列し、一覧表を作成するのである。
もちろん限られた数の地名をサンプルとするのであるから中国語の全ての音節をカバーすることはできない。地図帳の地名に現れなかった音節に
ついては、他のサンプルから割り出した規則性に従ってこちらで補充して一覧表を完成させる必要がある。

実は、この補充の作業の過程であれこれ苦労していると、そのお陰でこのカタカナ表記の仕組みが分かってくる。作業の主な過程を紹介すると、
まず最初の「a」の音節が地図の地名にない。これに「ア」を当てるか「アー」を当てるかは、他の単母音がどう表記されているかで決まる。他
の単母音を見ると全て「ー」で伸ばした長音で表記されているので、「a」は「アー」となるはずである。実際中国語の単母音は声調を伴ってい
るため日本語の単母音より長いので、これは適切な表記であらう。

次に「ang」が地図帳の地名に見出せないのであるが、他の音節では「n」も「ng」も「ン」が当てられているのでこれは「アン」である。「ba」
と「pa」はどうだろうか。「ba」は地名にあるが「pa」はない。これは全体を見回せばすぐに分かることなのであるが、この地図帳式カタカナで
は有気音と無気音が区別されず、全て清音のカナに当てられる。よって「ba」と「pa」は区別せず両方「パー」と表記される。

ここにこのカタカナ転写の特徴を読みとることができよう。中国語では「b」は無気音、「p」は有気音である。清音濁音の対立ではない。清
濁に分けるなら有気音・無気音は双方清音に属する。「ba」と「pa」をカタカナ表記するとき、双方区別なく「パー」に当てるといのは音声面
を重視した転写法だと言えよう。有気であろうと無気であろうと清音であるからには、日本語の清音「パー」に当てべきだ、という考え方に基
づいているわけである。一方これを区別して「ba」を「バー」、「pa」を「パー」に当てる、という考え方も当然あり得るわけで、これは識別のファ
クターを重視した転写法だと言える。有気も無気も共に清音に属するという音声学的側面は描いておいて、敢えて有気音／無気音を清音／濁音に
それぞれ当てるということは、双方を分けない方法に比べれば音節を区別するには適していることは言うまでもない。これは中国語の知識なしに

既存のローマ字のイメージから「ba」を「バ」、「pa」を「パ」と安易に読む、というのと混同してはならない。たとえそれが清濁の対立に訛っていたとしても、区別がないよりは区別があるだけまだしも通じる、ということはあり得ることである。

また「ji」「qi」「zhi」「chi」はいずれも区別なく「チー」である。整理すると

無気舌面音「ji」	有気・無気の区別なし
有気舌面音「qi」	
無気捲舌音「zhi」	有気・無気の区別なし
有気捲舌音「chi」	
	舌面・捲舌の区別なし ↓ 「チー」

誤解なきようお願いしたいが、このように区別をなくすことをここでは非難しているのではない。これをカタカナ表記で区別することは困難である。どの書籍かは失念したが

無気舌面音「ji」を「ジ」

有気舌面音「qi」を「チ」

無気捲舌音「zhi」を「チ」

有気捲舌音「chi」を「チ」

と表記している本もあった。苦勞の跡がしのばれるが、識別要素としては有効だとしても、これとて中国語の未習得者に対してどれほど有効かは保証の限りではない。これらを区別なく「チー」とするのも一つの見識である。しかし一つ指摘しておきたいのは「zha」の表記が「ツァー」となっている点である。他の音節の原則に合わせれば、「cha」が「チャー」ならば「zha」も「チャー」でなければならぬ。関連する声母の音節を見るに、

zha	ツァー
zhai	チャイ
zhan	チャン
zhan	チャン
zhao	チャオ
cha	チャー

である。明らかに「zha」のみ異質だ。もちろん地方によっては「zha」を「ツァー」のように読むところもあるが、その場合は他の音節も

「ツアイ」「ツァン」「ツアオ」となる。これは地図帳自らが定めたはずの表記原則を混乱させるものである。

この地図調式カタカナには実は他にも表記上の問題がある。「di」「di」の不統一である。例えば「周口店 Zhou kou dian」が「チヨウコウテン」、
「保定 Bao ding」が「パオチン」とあるように、この地図帳では「dian」が「テン」と「ding」が「チン」と、それぞれ表記されている。「dian」
「テン」に特徴的なのは、先ほどの「チャン」が*i*介音にこだわっていたのと打って変わって、*i*介音を無視している点である。ところが「ding」
「チン」の特徴は「di+eng」の「di」を「ティ」ではなく「チ」と、日本語的音節にしまっている点である。同一声母、同一介音にこのよう
に別の表記を与えてしまっているため、他に矛盾が生じてくる。つまり地図帳にサンプルのなかった音節「diao」「tiao」のカタカナが確定しづ
らくなるのである。「dian」は「ティエン」とも書けるような音声なのだが、「テン」が単純に*i*介音を無視したものならば、その原則により
「diao」は「タオ」としなければならないことになる。これではあんまりなので、「diao」の「iao」の部分「iao」とすれば「テアオ」となる
う。ところが一方「ding」の「di」が「チ」であることからすれば、「diao」は「チャオ」となる可能性も出てくるのである。また「die」につい
ても同様で、*i*介音を無視すれば「テ」、「di」を「チ」と取れば「チエ」としなければならない。ところが「tie」は地図上では「ティー」となっ
ているから話がややこしい。それに揃えれば「die」は「ティー」なのである。

diao テアオ(タオ) もしくは チャオ

die テー(テ) もしくは チエ

ここではまだしも実際の中国語の音声に近い「テアオ」とそれに対応する「ティー」を、取りあえず採用しておく。考えるに、「小浪底 Xiao lang
di」という景勝地を「シャオランディー」としており、「di」を「ディー」と表記している以上は、このシステムで「ティ」の表記を使用して一
向に差し支えないはずである。

dian テン ↓ ティエン

ding チン ↓ ティン

diao テアオ ↓ ティアオ

die テー ↓ ティエ

とすれば何の問題もないのではなからうか。

さらにこの表記の揺れは他の音節にも影響を与える。「dian」が「テン」ならば無声母の「yan」は「エン」となるのが道理であろうが、地図
上では「イエン」となっている。右の原則からすれば「ie」は「レー」、「xie」は「セー」となるところであろう。「tie」が「ティー」ならばそう
なるはずなのである。しかしこれはどうにも違和感がある。常識的には「ie」は「リエ」、「xie」は「シエ」がよいのではなからうか。

同様の問題は他にもあるが、敢えてもう一箇所指摘するならば「du」と「tu」が「ツ」になっている点であろう。このままなら「duo」「tuo」は「ツオ」となるべきところであるが、実際には双方「ト」になっており、「dun」「tun」は「ツン」となるべきところであるが、双方とも「トン」となっている。また「duo」「tuo」が「ト」であることは「tuo」「ruo」「shuo」「zhuo」「zuo」がみな「ウオ」となっている点とも矛盾する。こうなると地図上に例のない「duan」「dui」「tuan」「tui」をどうするか悩むところだが、ここではそれぞれ「ツァン」「ツイ」ではなく「トワン」⁽²⁾「トイ」としておいた。これとて例えば、

du / tu ツー ↓ トゥー

duo / tuo トー ↓ トゥオ

とすれば少なくとも表記の統一はとれるはずなのであり、さらに

duan / tuan トゥァン

dui / tui トゥイ

とも矛盾が生じなかったはずなのである。また「ga」が「ガ」となっているが、既に見た単母音は長音、有気無気は区別なし、の原則からすれば「カー」とすべきであろう。

また「un」韻母については「dun」「tun」のみ「トン」で「オン」となっており、その他は「cun・hun・kun・lun・zun」がそれぞれ「ツン・フン・クン・ルン・ツン」と「ウン」なっていて、少々不統一である。さらに「wen」の音節と「○+un」（○は声母）の音節については実は同一韻母で、

u + en → wen

○ + u + en → ○ + uen ↓ わたり音の e を省略して ○ + un

なのであるから、原則からすれば本来は「wen」は「ウン」となるところであろうが、これは少々無理であろう。これは「ウェン」が妥当なところである。

また日本語にない「ü (yu)」は「ユイ」の表記を取っている。関連する音節については例えば「ju」「qu」「xu」がそれぞれ「リュイ」「チュイ」「シュイ」、「[ue]」「[xue]」が「リュエ」「シュエ」。そして「xun」が「シュン」となっている。

さて、このようにして補完して作成した地図帳式中国語音カタカナ表記一覧表を末尾に添付しておいたのでご覧いただきたい。表中※を付けたものは、地図帳の実際の地名上には発見できず、他の音節の表記規則から類推して補完したものである。bou・fai・fao・tei・ten・len・rai・reiなどの音節は、理論上は存在しても実際には全く用いられない音節なので省いている。また擬声語であり地名に用いられることが全くない音

節も省いた。例えば、hm・hng（「フン！」と鼻を鳴らす音）ng（いぶかしむときの「ん？」）q（「チェツ」という舌打ち）sh（制止するときの「シーツ」）などである。

三、地図帳式カタカナ表記の特徴

この一覧表の作成の過程で見出したこのカタカナ表記の特徴を以下に整理してみよう。

○中国語の音声イメージを重視

この地図帳式カタカナ表記には音節の識別よりも中国語の音声イメージを重視する傾向が窺える。但しそれは以下に整理するように、決して場当たりに適当に当てられたカタカナではなく、語学的な根拠に基づいて系統的に用いられた表記システムになっていることは確実である。その主な特徴は次のようなものを挙げることができる。

ア、有気音と無気音の対立は無視

既に見たように「ba」「pa」は双方とも「パ」が当てられているなど、有気・無気の対立は無視されて全て日本語の清音が当てられている。これはカタカナ表記の基本的な姿勢に関わるものとも言える。中国語の有気音と無気音は清音・濁音で言えば双方清音に入る。これを区別せずに双方日本語の清音に当てるか、敢えて有気音を清音に、無気音を濁音にそれぞれ区別して当てるか、いずれも一長一短あって可否を即断しがたい。少なくとも言えるのは、区別せず清音に当てる方法はどちらかと言えば音声学的イメージを重視したやり方で、清音濁音に区別するのは音声学的特徴には取って目をつぶり、対立を保って音節を識別する要素を増やすやり方だ、ということであろう。もちろん有気音・無気音を双方清音に当てるという原則が貫徹されている限りそれはそれで理にかなっているものであり、場当たりにランダムに表記を変えるのとは根本的に異なる。

イ、u 介音の表記

例えば「guan」は「クアン」や「クワン」と表記してもよさそうなものだが、この地図帳では「コワン」と表記している。「広州」は「コワン」
「チョウ」、「広東」は「コワントン」である。また「chuan」は「チュアン」ではなく「チョワン」で、「四川」は「スーチョワン」。「u」介音の「ua」には「オ+ワ」の表記を用いていることが分かる。これはこのカタカナが、ローマ字の綴り方よりも実際の音声を表現しようとしていることを示している。

ウ、i 介音の表記

既に触れた、拗音の小さい「ャ」と通常の大きい「ヤ」がどのように使い分けられているかを整理してみると、

「チャン」と表記されるもの chan' chang' zhan' zhang'
「ジャン」と表記されるもの jiang' qiang'

「チャオ」と表記されるもの zhao' chao
「ジャオ」と表記されるもの jiao' qiao

「シャオ」と表記されるもの shao
「シャオ」と表記されるもの xiao

これで明らかのように、i 介音の韻母は大きい「ヤ」、それ以外の韻母は拗音の「ャ」で表記されているのである。確かに介音の「i」は中国語では比較的はっきり発音されるので、これを拗音ではない「ヤ」で表すのはその点で言えば有効であり、誠に細やかな配慮だと言うことができる。エ、単母音韻母は長音

「a」は「アー」、「wu」は「ウー」、「yi」は「イー」のように、単母音は「ー」を加えて長音を当てている。「bo」は「ポー」、「bu」は「プー」、「da」は「ター」のように有声母の場合も同様。これも中国語の音節から考えれば納得できる。

○日本語にない音声表記の工夫

日本語にはない音節、或いは日本語のカナでは表現が困難な音節をどう表記するかは、外来語のカタカナ表記では避けて通れない問題である。この地図帳式カタカナでもその点に工夫が見られる。例えば「e」が「オー」、「er」が「アル」、「qu」は「チュイ」。「en」と「eng」の区別については、「en」は「エン」、「eng」は「オン」となっている。但し「in」と「ing」については双方「イン」。

ただこの工夫が裏目に出た部分もあって、既に触れたように「dun」「tun」が「トン」、「cun」「zun」が「ツン」などという不統一を生じている。ただこれは「dun」「tun」を「トゥン」と書いて「トゥ」の表記を導入することを嫌ったためかもしれない。「du」と「tu」を「トゥー」とせず「ツー」としたのと同じ理屈である。

「ü (yu)」母音については既に触れたが、それに関連して「yuan」が「ユワン」と表記されている。これは現代の標準音では「ユエン」という表記に近い音である。「ユワン」という読みもないではないが、標準音では「ユエン」ということになっている。有声母の「quan」「xuan」も「チュワン」「シュワン」だが、やはり「チュエン」「シュエン」が標準音である。日頃中国語の教室でせっかく「ユワン」と読んでダメだよと指導しているのに少々困りものだ。

四、地図帳の地名表記上の問題点

1、カタカナ表記に関わるもの

右に指摘したのは、この地図帳式カタカナの表記の原則そのものの特徴と問題点であった。次にここで考察するのは、そのカタカナ表記の原則を一応確定したものと了解した上で、さらに地図帳上の具体的・個別的地名の表記に見出される問題である。こうしたことを考え始めると、そもそも中国の地名を「カタカナ現地音」なるもので表記すること自体が矛盾だ、というところはどうしても行き着いてしまうし、小論の最終的な結論ももちろんそこにあるわけである。しかし今ここでいきなりそれを言ってしまうては身も蓋もない。ここでは議論の順序として、既に整理したような表記の原則を認めてその原則に立った上で、地図帳自身がなおその原則に矛盾する表記をしている地名について考察してみたい。

「北京」は「ペキン」、「南京」は「ナンキン」である。ところが一方「天津」は「テンチン」である。「ペキン」「ナンキン」の読みはいわゆる唐音である。「てんしん」は漢音の音読みである。従来どの都市が唐音と呼ばれどの都市が呉音や漢音と呼ばれたかは、個別の歴史的経緯からたまたまそうなっているのであって、いまさらそれをとやかく言っても仕方がなからう。問題はこの地図帳の判断基準である。もし「北京」と「南京」に地図帳式カタカナを適応すればそれぞれ「ペイチン」「ナンチン」となる。「北京」と「南京」は従来の唐音（或いは慣用音と言ってもよからう）、「天津」はカタカナ現地音、という区別の基準がどこにあるのか。

唯一考えられるのは、日本人にも有名な地名で従来の呼び方にも馴染みのあるものは従来どおりの慣用読み、そうでない地名は一律カタカナ現地音、という基準である。この予想を助けるのは少くとも旧版では、「赤壁」「五丈原」「雲崗石窟」「馬王堆漢墓」などの史跡や名勝が索引中で「音読み」で扱われていることである。なるほど「赤壁の戦い」や「五丈原の戦い」で有名な地名を「チーピー」だの「ウーチャンユワン」だのとするのはためらわれたのであろう。しかし一方では「泰山」が「たいざん」で「蛾眉山」が「オーメイ山」となっているなど、どこまでが名勝古跡でどこまでが一般地名かの線引きは非常に難しい。

とまれ、「北京」「南京」「天津」についてはその表記法の適用からして、「北京」と「南京」は日本人にとってメジャーな地名、「天津」はマイナーな地名、という価値判断があると見られても仕方あるまい。しかし私が子供の頃から好物だったのは「てんしん甘栗」であって「テンチン甘栗」ではない。「天津」はそれほどマイナーな地名なのだろうか。

私の学生に、中学高校の地理の授業でこうしたカタカナはどう扱っていたか尋ねてみたら、ある学生によると彼の先生は「ここにはテンチンと書いてあるけど、これは天津てんしんのことだよ」とわざわざ板書なされた、とのことである。教育現場に余分な混乱をもたらす可能性はないのであろう

か。

重箱の隅をつつき始めるときりが無いが、台湾の「基隆」はどうだろうか。もちろん台湾での発音は「キールン」に近いが、標準語では「long」つまり「チーロン」である。「基隆」が従来の慣用語読みということとは「天津」よりメジャーな地名だということであろう。確かに上の世代の方々には「基隆港」は懐かしい響きを持った地名かもしれない。しかし「天津」と「基隆」で線引きをする合理的理由を私は考えつかない。

少々余談になるが、コンピュータの日本語FEPも、こうしたカタカナ現地音をシステム単語の読みとして取り入れていようである。「天津」という漢字を入力する場合、「てんちん」という仮名から変換する人がいるとは到底思えないのだが、しかしこれはまた別個の問題なので、FEPのシステム登録単語についてはまた別稿で論じたいと思う。

「ü(yu)」は「ユイ」であることは既に見た。しかし地図上の嘉峪関では「チャーユーコワン」となっていて他と矛盾する。瀘州は「リュイチョウ」となっているがこれは「ルーチョウ」とすべきであろう。「bai」は「バイ」なのに「百色」のみは「ポーソー」。既に見たように「ding」は「チン」なのに「平頂山」のみは「ピンティンシャン」(ならば「ティン」に統一すればいいのに……)。「gao」は「カオ」なのに「莫高窟」は「モウコウク」。これは「モーカオクー」とすべきであろう。そもそも「莫高窟」は遺跡だから音読みすべきだと思うのだが……。「葛洲壩ダム」の「コウ、チョウ、パ」は「コー、チョウ、パ」、「流溪河ダム」の「リュウ、シー、ホウ」は「リウ、シー、ホー」、「焦作」の「チャオ、ツォ」は「チャオ、ツォ」、「聊城」の「リャオ、チョン」は「リャオ、チョン」、「融橋」の「ロン、チャオ」は「ロン、チャオ」、「憑祥」の「ピン、シャン」は「ピン、シャン」、「襄樊」の「シャン、ファン」は「シャン、ファン」と、それぞれすべきである。誤解しないでいただきたい。「すべきである」というのは私の意見ではない。他の地名の表記の原則に合わせれば、そう書くべきではないのか、という老婆心である。

また「敦煌 Dun huang」は「トン、ホワン」となっている。「dun」「tun」のみ「トン」、その他は「cun・hun・kun・jun・zun」などは「ウン」という使い分けがあるからである。面白いことに『二宮書店版』では、同じ「敦煌」を「ツン、ホワン」としている。「tun」についても全て「ツン」にしているようだ。どう考えても「トン」の方が中国語の音声に近いように思うが、それはさて置いて、これは「du」「tu」を「ツ」¹²⁾と¹³⁾する原則を「dun」「tun」にも適用しているからである。これを整理するに、『帝国書院版』では「du」「tu」が「ツ」の原則をここだけだけ¹⁴⁾応せずに「dun」「tun」を「トン」としており、『二宮書店版』ではあくまで「du」「tu」が「ツ」の原則を適用して「dun」「tun」を「ツン」としている、ということになる。臨機応変に原則を曲げた『帝国書院版』の方がまだしも中国語の音声に近く、原則を貫いた『二宮書店版』の方が中国語の音声から遠くなってしまった、という皮肉なことになっている。それにしても、地図帳が自ら定めた原則に地図帳自身が振り回されている感がある。

2、カタカナ表記以外の問題点

さらに本題からは些か逸れるかもしれないが、カタカナ表記以外の問題点についても考察してみたい。まず河川名の表記である。例えば、

淮河 (Huai he) ↓ ホワイ川

珠江 (Zhu jiang) ↓ チュー川

渭水 (Wei shi) ↓ ウエイ川

これは少々理解しがたい表記である。「河」も「水」も「江」も、河川の名前はみな「川」に直している。「漢水」も「錢塘江」も「永定河」もみな「ハン川」「チエンタン川」「ヨンチン川」なのである。しかしこれらの河川名は「河」や「江」や「水」を分離できるものだろうか。「渭水」も「漢水」も「かわ」に違いはないが、絶対に「川」と呼ばれることはないし、もちろん「河」とも「江」とも呼ばれはしない。中国語で「かわ」を表す一般名詞は「河」であるが、全ての河川名に「河」が付くわけではなく、「河」が付く名は決まっている。それは固有のものなのである。

では尋ねるが、なぜ「黄河」は「こうが」で「長江」は「ちょうこう」なのか。この地図帳では一般の地名はカタカナ表記で漢字は（ ）入り原則なのだが、「黄河」と「長江」は漢字が大きく書いてあり、(ホワンホー) (チャンチャン) とカタカナの方が（ ）に入っている。つまり名勝扱いなのである。しかし他の河川を「川」とするなら黄河と長江も特別扱いせず、

黄河 (Huang he) ↓ ホワン川

長江 (Chang jiang) ↓ チャン川

とするがよいではないか。それが原則というものだ。それにしても安っぽい黄河と長江もあったものである。

考えるに、実はこれは現地音表記のなせるわざなのではないのだろうか。西洋の川の表記では、「Thames R.」を「テムズ川」「Rhein R.」を「ライン川」「Seine R.」を「セーヌ川」としているわけである。考え方としては、「Thames」は現地音表記で「テムズ」と読む、「River」の部分は固有名詞ではなく一般名詞であるから「川」と訳してリバーとは読まない、ということである。それと同じ事をそのまま中国の河川にも適用しているのではなからうか。「淮河」は「淮」が地名だから現地音表記、「河」は一般名詞だから「川」と訳す……。しかし、はっきり申し上げるが、「現地」では「淮河」を「淮川」とは絶対に呼ばない。中国の河川名はそこで切り離すことはできないのではないか。西洋の「River」とは性質が違うのではないだろうか。黒龍江が河川名の際は「ヘイロン川」で、黒龍江省という省名の際は「ヘイロンチャン」省、というのも馴染めない話だ。

またもっと笑えるのが運河の名称である。「大運河」が「ター運河」となっているのだ。「大」の部分の固有名詞だと言うのである。さらに「万里長城」が新版では「ワンリー長城」となっており、旧版では「ワンリーの長城」となっていた。日本語ならば「万里の長城」であるが、その

「万里」だけを固有名詞としているわけだ。「大」も「万里」も一般の形容詞と数詞である。決して地名ではない。但し事実上「大運河」と呼べるのはあの運河一つなのであり、「万里の長城」もあの長城以外には存在しない。そこで結果的に「大運河」と「万里長城」がそれぞれ一語で固有名詞として扱われる、ということなのではないだろうか。「大興安嶺山脈・小興安嶺山脈」も「大シアンリン山脈・小シアンリン山脈」と表記されているが、それならこれも「タ、シアンリン・シヤオシアンリン」とすべきではないだろうか。

そうすると湖沼の名称も気になってくる。「洞庭湖」が「トンチン湖」というのはまだしも納得できる。「トンチンフー」ではまずかろう。しかし「太湖」が「タイ湖」というのはいかなものか。地図上の表記は「タイ(太)湖」となっている。やはり「太」のみが固有名詞だと見なししているのである。中国人が「太」と「湖」を分けて考えるだろうか。「太湖」は「太湖」なのである。「西湖」「東湖」という名の「西」と「東」が固有名詞だ、とは言えまい。では「青海湖」「チンハイ湖」はどうか。この「海」は大きな湖を示す言葉だから、これを分離させてここは「チン湖」としてはどうかだろう。

これで行くと例えば○○州という地名、「蘇州」「徐州」「福州」「常州」なども「スー州」「シュイ州」「フー州」「チャン州」としなければならぬことになりはしないか。それこそ西洋の「○○ブルク」「○○バーグ」などの地名をそこだけ「○○城」と訳せ、というようなものではないか。「神奈川」を「Kana River」、「横浜」を「Yoko Beach」と訳すという行為とあまり変わるまい。他にも、○○潭・○○溪・○○城といった地名は、どこまでが固有名詞なのだろうか。港はどうだろう。「連雲港」は「リエンユンカン」ではなく「リエンユン港」になりはしないか。では「香港」は「ホン港」？ 島はどうだろう。「青島」は「チンタオ」ではなく「チン島」ではないのか。湾や海は？「台湾」は「タイ湾」？「上海」は「シャン海」？……きりがないのでここらでやめておこう。

各省の省名についてこの地図帳は「シャントン(山東省)」「シャンシー(山西省)」「ホーペイ(河北省)」「ホーナン(河南省)」の如く、カナ現地音には「省」の字を付けていない。これは一見して都市名と省名が分かりにくいと思うが、確かに中国では必ず「省」を付けて言うわけでもなく、中国で出版されている地図には「省」を付けていないものが多い。自治区については「ニンシヤ(寧夏)」「回族自治區(ウイグル自治区)」「チワンチ(チワン族)」「チワン族」と表記されることが多い。「チョワン」の表記は壮という漢字音写のカタカナ表記であろう。

次にこの漢語音写の地名の問題である。内モンゴル自治区の「フホト(フフホト)」が気になる。モンゴル語の知識のない私の臆断であれば予めお詫びするが、この地図帳の「フーホオト」という表記は漢語音写の読みではないだろうか。モンゴル語のローマ字表記では「Huhhot」が最も原音に近いそうである。そうすると「フホト(フフホト)」という従来の呼び方は、このモンゴル語の発音をカタカナで表したものであろう。一方地図帳の「フーホオト」の読みは、既に見た表記の原則からして「呼和浩特」の漢字音ではなからうか。そうすると地図帳は、モン

ゴル語を漢語に転写したその漢字の中国語音をカタカナで表記する、という回りくどいことをしているわけである。何を以てして「現地」音と言うかは難しい問題であるが、少なくとも「呼和浩特」は漢語オリジナルの地名ではない。外語の地名を漢字で「当て字」したものである。モンゴル語で「フーホハオト」と言う学生たちに誤解を与えないだろうか。これは喩えて言えば、「England」のことを日本語で「イギリス」と言うからローマ字表記で「Ingisu」と書く、というくらい回りくどいやり方のような気がしてならない。一方「額爾古納河」は「アルグン川」で漢語音写は採用していない。「翁牛特旗」^{ウニウツトナ}「阿魯科爾沁旗」^{アルコアルナ}などの読みは漢語音写のカタカナ表記であろうが、これは満州語の読みにしなくてよいのかも気になる。

五、最大の矛盾——検索不可能

以上述べてきたことについては、私自身重箱の隅をつついていくらか細かい注意を払って作成しても、カナで中国の地名を完全に表記できるはずもないことは百も承知している。偉そうに言うなら、ではお前のカタカナ表記を提案せよ、と言われるとぐうの音も出ない。結局小論の主旨は、このようなカタカナ現地音による中国地名で地図帳という一つのシステムを構築することの矛盾、ということなのである。

今仮に、特に中国語の知識のない一般の人が地図帳に中国の地名を探そうとしているとしよう。例えば有名な「桂林」ってどの辺にあるのかな、と地図帳を手取る。巻末の索引を見る。「け」の項目に「けいりん」がない。そこで索引を見回すと「アンカン」「アンシャン」「イーチャン」「インコウ」「ウーウェイ」「ウーシー」……どうも中国語読みで引かなければならないと気づく。しかし家に中国語辞典はない。最近の漢和辞典は音訓に添えて現代中国語音の拼音ローマ字が示されているものが多い。幸いにも「桂」の字の中国語発音は「gui」であることが見つかった。勇躍再び地図帳の索引の「グイ」のところを見る。果たしてそこにも「桂林」の地はなかった…。

「桂林」が「コイリン」で索引に配列されていることを、一体全体この人はどうやって調べればいいと言おうのだろうか。中国語の「G.E.」という発音は、カタカナでは「クイ」「グイ」「コイ」「ゴイ」「クエイ」「グエイ」などの表記が可能なのであり、いずれにもそれなりの理屈がある。もちろん統一などされていないし、統一は不可能である。「コイ」という表記はこの地図帳がたまたま独自にそう決めた、というに過ぎない。地図帳自体に中国語のカタカナ表記一覧表が示されていない（実際学校の社会科教材にいちいちそこまで載せられない）以上、「桂」の発音「gui」のカタカナ表記が「コイ」であることを調べる場所はどこにもないのである。これでは索引の使いようがないではないか。唯一の方法は、実際の地図の中国のページで「桂林」の場所に書かれている「コイリン」というカタカナを見ることである。ということはつまり、地図帳で「桂

林」を探すには予め地図上で「桂林」を探しておかなければならない、という誠に不条理な状況になっているのである。

ハンゲルの知識のない私が言うのも僭越だが、朝鮮語の地名もそうだ。「鴨緑江」は「おうりょくこう」では索引に出てこない。「鴨緑江」は「アムノック川」として配列されている。一般の人がみんな事前に「アムノック」(『二宮書店版』では「アムノク」⁽¹⁶⁾)というカタカナを知っているということがあり得るだろうか。「鴨緑江」は中朝国境を流れる川だから、当然中国語読みも索引に載っている。「ヤール川」である。英語ではこの川は「the Annok」ではなく「the Yalu」と呼ばれることが多いから、これはまだしも日本人に馴染みのある読み方であろうが、それにしても「アムノック」や「ヤール」ではなく「おうりょくこう」で索引が引けなければ困るのではなからうか。

そうした視点で地図帳の索引を見ると、中国の地名に関する限り、ほとんど索引の役に立たない。旧版の索引で赤字になっていた一部地名、つまり索引が「歴史的地名」と認定した地名については、音読みで引けるようになっていて、「杭州」↓「ハンチョウ」「蘇州」↓「スーチョウ」「西安」↓「シーアン」「洛陽」↓「ルオヤン」のように矢印で「カタカナ表記を見よ」と指示がついているが、配列は音読みの五十音順である。一方同じ「歴史的地名」でも都市名ではなく遺跡や古跡ならば「殷墟」「赤壁」「半坡」「陽関」のようにカタカナなしの音読みのみである。きめ細かい体例、誠に苦労なことである。お陰で全部カタカナ現地音のみの索引よりは少しは使えた(人々が地図帳で捜したい地名は名勝古跡ばかりとは限るまいが)。ところが新版では、それさえもすべて削除されてしまったのである。ちなみに旧版では「大運河」は「ター運河」でのみ出てきて「だいりやんが」では見つからないのに、「万里長城」は「ばんり……」でのみ索引に配されて「ワンリー……」では出てこなかった。これが新版では「ター運河」と「ワンリー長城」に統一されてしまっている。

結局地図帳を一つのシステムとして見たときの最大の欠点は、こうしたカタカナ現地音で索引を作ってしまったことにある。地図の索引は地名を地図上に探すためにある。地名が探せればそれでよいのである。そこにカタカナ現地音を持ち込んでしまうと、地名が探せなくなってしまう。私個人は中国地名のカタカナ現地音表記は特に必要ないと思っている。唐音(慣用音)を含む音読みで十分である。中国人は東京を「Tokyo」ではなく「Dong jing」と呼ぶのだし。しかし地図上の地名にカタカナ表記を加えるというのも決して悪くはない。私は絶対に音読みだけしか許さない、などと言っているのではない。地図の上なら結構である。しかし索引はまずい。どう読むか分からない読みで索引を作ってしまうと言うのか。

索引はやはり共通の情報、そして検索可能な情報によって配列しなければならない。たとえ中国の地名に読みを知らないような難しい漢字が出てきても、音読みならば漢和辞典で調べることができる。しかし時と場合でランダムに表記の変わる、或いは事前に調べる術のないカタカナ現地音ではお手上げなのである。一応中国語でおまんまを頂いている私でも、それらしいカタカナを探して索引を右往左往……、というのはまっぴらご免だ。

繰り返すが私はカタカナ現地音表記を全面的に否定するつもりはないのである。しかしカタカナというのは所詮、ちゃんとした音読みで索引を引き、索引から実際の地図上にたどり着いて、その上でああ中国語ではこんな感じで読むのかと知る、という程度のものに過ぎないのであって、これによって検索のできるような情報ではないのである。ましてや昔から「天津」と読み慣わしてきたものを「テンチン」と読めと地図帳が人々に強制できるものでもあるまい。地図帳の索引は全体が大きく「外国の部」「日本の部」に別れている。「日本の部」はもちろん漢字表記で読みの五十音順だ。せっかくこうなっているのなら、これを「外国・カタカナの部」「外国・漢字の部」と「日本の部」分けてはどうだろうか。もちろん中国地名は音読みで五十音順である。或いは「漢字の部」として日本と中国その他を合併してもいいかもしれない。但し地名を「日」「中」などの記号で区別する必要はあるうが。実際教材用の地図帳ではなく本格的な大型地図帳では、「欧文アルファベット索引」「カタカナ索引」「漢字索引」「日本地名索引」「難訓地名索引」と索引を何種類も用意しているものもあるのである。

ここで誤解なきようお断りしておきたいのだが、私は小論でこの地図帳を作った方々のご努力を否定するつもりは決してない。それどころか右のような分析の作業の過程で、以前から地図帳を利用して気づいていた細かな誤植が最新版で丁寧に訂正されているのを見出し、そうした編集・改訂のご努力に心から敬服してしまった。

例えば、以前の版にあった誤植は新版では次のように訂正されている。

旧版

新版

- | | | |
|----------------------|---|---------------------------------------|
| 陝西省の読み「シャンシー(シェンシー)」 | ↓ | 「シェンシー」を削除して「シャンシー」に訂正 ¹⁸⁾ |
| 遼寧省・瓦房店が「ロトファンテン」 | ↓ | 「ワトファンテン」に訂正 |
| 遼寧省・楊家杖子が「ヤンチャチャウツ」 | ↓ | 「ヤンチャチャンツ」に訂正 |
| 山西省・河辺が「ホーフェン」 | ↓ | 「ホーピェン」に訂正 ¹⁹⁾ |
| 陝西省の潼関 | ↓ | 潼関に訂正 |
| 四川省のフオウ川(涪河) | ↓ | フオウ川(涪河)に訂正 ²⁰⁾ |
| 四川省のチュイ川(巴水河) | ↓ | パオ川(巴河)に訂正 |
| 広東省のチュー川(珠江) | ↓ | (珠江)に訂正 |
| 福建省のアンユワン(安遠) | ↓ | (安遠)に訂正 ²²⁾ |

また旧版では「汨羅」が「汨羅」になっていたが、新版では「汨羅」の地名自体が削除されている。

小論で試みたカタカナ表記の調査では大きい「ヤ」と小さい「ャ」の区別、点の有無、漢字の一画一画に注意しなければならない。そのため、それこそルーペで地図帳を細かく見ていてたまたま発見したこうした誤植が、新版では丁寧に訂正されているのには感心した。大変緻密で根気の要る作業であろう。私が発見して新版にまだ残っている誤植は

河北省の永定河と桑干河の位置が10ページと11ページで少し違う

山東省の「薛城」は「薛城」が正しい

安徽省の「蚌埠」の読み「パンブー」は「ボンブー」が正しい⁽²³⁾

というくらいである。せっかくこれほど丁寧に編集しておられる地図帳である。学生時代だけではなく大人になっても使う地図帳である。私も一冊居間に置いてあり、テレビで出てきた地名をしばしば調べている。是非索引についても使いやすく改訂して下さい。せっかくなのでご努力もカタカナ現地音表記の作成に費やされる限り、読者の便とならず空しい。

小論では地名について考察したが、人名については状況が地名とは少々異なる面はあろう。日本で暮らす中国人が、私のことは「王^{おう}」と呼んでくれ、いや私は「王^{ワン}」と呼んでくれ、ということは個別にあつてよい。それは決して否定しない。それは、本人が必ずこう呼んでくれと宣言する場合も、日本に来てから何となく成り行きでそう呼ばれるようになったという場合も、それぞれあろう。

しかし地名と同じことが言えるのは、その検索方法である。例えば名簿を作る、その名簿の索引を作る、と言う場合だ。「王^{おう}」さん「王^{ワン}」さんという個別の呼び方はさて置いて、あくまで検索のための「道具」としては、誰でもが共有できる情報を用いなければならない。日本語環境に於いて中国人名を配列・検索するための共有情報はやはり音読みしかないであろう。「王^{おう}」さん「王^{ワン}」さんは索引ではやはり「おう」のところになければ困る。個別の読みで配列しては、誰がどこにあるか検索できないからである。

しつこいようだが私は、全て音読みで読まなければならない、と押しつけるつもりはない。但し、中国語のできる人もできない人も、漢字の好きな人もカタカナの好きな人も、すべて地図帳で中国の地名を検索することが可能なシステムが必要なのである。カタカナが好きで漢字が嫌いな人のために地図帳が作られてしまうと、ある地名を地図帳に探し出せなくなってしまうのだ。

もちろんそれは個別の人の言葉の使い方を制限するものではあり得ない。「僕は北京に行ってきた」と言うのを

「北京^{ペキン}に行ってきました」(唐音)

と言おうと

「北京^{ペキン}に行ってきました」(カタカナ現地音表記)

と言おうと、それから極端な話、

「北京ほくけいに行ってきました」(漢音)

と言おうと、それはそれぞれの勝手なのである。必ず音読みで読まなければならない、などと押しつけるのは愚の骨頂である。もちろん必ず現地音で読まなければならない、と押しつけるのも同罪だ。但し「ほくけいに行った」では絶対に通じない。そして「ペイチンペイチンに行った」というとキザな野郎だと思われるかもしれない。それだけの話だ。そして「ベキンベキンに行った」というのが一番通じやすい普通の言い方であることは、どう考えても否定のしようがないと思うのである。

注

- (1) 二〇〇二年一月十四日 NHK-FM ベストオブクラシック「リュウ・ウェイ バイオリンリサイタル」19時20分～21時00分 九月十六日再放送
- (2) 馬思聰 (1912～1987) バイオリニストで作曲家。代表作は「思郷曲」「内蒙組曲」など。
- (3) 『FM Club』No.20 2002.9.16～9.29 九月十六日「ベストオブクラシック」欄19時15分～(再放送分)
- (4) この放送のリサイタルのソリスト「リュウウェイ」は、「劉薇」(Liu Wei)。この人の名前にしても、「リュウウェイ」「リウウェイ」「リュウウェイ」「リウウェイ」「リュウウェイ」といった表記の可能性がある。
- (5) 帝国書院のものを選んだのには特に理由はない。たまたま私が小中高と帝国書院の地図帳で学んだので手近にあったこと、また地理の教材として広く用いられているということを考えてサンプルとしたのみである。小論執筆時の最新版、帝国書院編集部『新詳高等地図 一初訂版』(帝国書院二〇〇二年一月二五日)を用い、過去の版の『新編標準高等地図』も適宜参照している。また『新編 中学校社会科地図』『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』も参照した。
- (6) 小論執筆時の最新版、二宮書店編集部『高等地図帳 最新版』(二宮書店二〇〇二年一月三二日)を用いた。
- (7) 一四三頁「本地図帳使用上の注意」
- (8) 現在用いられている中国語のローマ字表記法を漢語拼音方案と言う。「*pin*」は合わせるの意で、子音と母音を組み合わせることで音声を表記することから言う。
- (9) *i* 介音の表記原則からすれば「シヤ、オランティー」とすべきところである。なお河南省「小浪底」の地名は最新版では省かれている。
- (10) 「*duan*」「*tuán*」を「トアン」ではなく「トワン」としたのは、「*guan*」が「コアン」ではなく「コワン」となっているからである。
- (11) 旧版の索引では「*：*」の記号が付されていた。
- (12) 『二宮書店版』では「*ding*」の表記が、「保定 Bao ding」では「バオティン」、「永定 Yong ding」では「ヨンチン」と少々不統一になっている。
- (13) 河川名に関しては例えば「ホワイ川(淮河)」のように、河川名全体が()に入っているが、大運河については「ター(大)運河」と明らかに「大」のみが固有名詞として扱われている。
- (14) 地図上では新版「ワンリー(万里)長城」、旧版「ワンリー(万里)の長城」と、()付きの表記になっている。
- (15) 韓国・朝鮮の〇〇里・〇〇院といった地名にも同じことが言えよう。

- (16) 帝國書院の「アムノック」の表記より二宮書店の「アムノク」の表記の方が、朝鮮語のパッチムの音声により近いように思われる。
- (17) Yalu Jiang, Jalu-ciang, Amnok-kang という表記も時折用いられるようである。
- (18) この「シェンシー」という読みがどこから来たかは不明。或いは「山西」と「陝西」をカタカナ表記すると両方「シャンシー」となって区別が付けかないので、第一声の Shan と第三声の Shan に少し別の読みを与えたのかもしれない。或いは「山」「陝」の音読みに引きずられたか。
- (19) 但しこれは「ホーピエン」ではなく「ホーピエン」とすべきであろう。
- (20) 涪、音は「きゅう」、「涪」、音は「ふう」で、別字。
- (21) 「チュイ」の読みは、巴河の下流の渠河チユイの読みが紛れ込んだのであろう。
- (22) 但し新版でも位置がやや西で江西省にあるように見えるが、実際はもう少し東で福建省内。
- (23) 「蚌埠」は「Bang bu」ではなく「Bang bu」なので表記の原則から「ボンブー」が正しいことになる。

地図帳式カタカナ 音節一覧表

	拼音	カナ表記	備考
1	a	ア	※
2	ai	アイ	※
3	an	アン	
4	ang	アソ	※
5	ao	アオ	※
6	ba	バ	
7	bai	バイ	
8	ban	バン	※
9	bang	パソ	
10	bao	バオ	
11	bei	ベイ	
12	ben	ベン	
13	beng	ボソ	※
14	bi	ビー	※
15	bian	ビエン	
16	biao	ビャオ	※
17	bin	ピン	
18	bing	ピン	※
19	bo	ボ	
20	bu	ブ	
21	ca	ツァ	※
22	cai	ツァイ	※
23	can	ツァン	※

24	cang	ツァソ	
25	cao	ツァオ	※
26	ce	ツォ	※
27	cen	ツェソ	※
28	ceng	ツォソ	※
29	cha	チャ	※
30	chai	チャイ	※
31	chan	チャソ	
32	chang	チャソ	
33	chao	チャオ	
34	che	チェ	※
35	chen	チェソ	
36	cheng	チェソ	
37	chi	チ	
38	chong	チョソ	
39	chou	チュウ	※
40	chu	チュ	※
41	chua	チュア	※
42	chuai	チュアイ	※
43	chuan	チュアン	
44	chuang	チュワン	※
45	chui	チュイ	※
46	chun	チュン	
47	chuo	チュオ	※

48	ci	ツ	
49	cong	ツォソ	※
50	cou	ツォウ	※
51	cu	ツ	※
52	cuan	ツワン	※
53	cui	ツォイ	※
54	cun	ツソ	
55	cuo	ツォ	※
56	da	ター	
57	dai	タイ	※
58	dan	タン	
59	dang	タン	
60	dao	タオ	
61	de	ト	
62	dei	テイ	※
63	den	テン	※
64	deng	トン	※
65	di	タイ	
66	dian	テン	
67	diao	テアオ	※
68	die	テー	※
69	ding	チソ	
70	diu	テイウ	※
71	dong	トン	

72	dou	トウ	※
73	du	ツー	
74	duan	トワン	※
75	dui	トイ	※
76	dun	トン	
77	duo	トー	トウオとすべし
78	e	イー	
79	ê	エー	※
80	ei	エイ	※
81	en	エン	
82	eng	オン	※
83	er	アル	
84	fa	ファー	※
85	fan	ファン	
86	fang	ファン	
87	fei	フェイ	
88	fen	フェン	
89	feng	フォン	
90	fo	フォー	
91	fou	フオウ	※
92	fu	フー	
93	ga	ガ	カーとすべし
94	gai	カイ	
95	gan	カン	
96	gang	カン	

97	gao	カオ	
98	ge	コー	
99	gei	ケイ	※
100	gen	ケン	※
101	geng	コン	※
102	gong	ゴン	
103	gou	コウ	
104	gu	クー	
105	gua	コワ	※
106	guai	コワイ	※
107	guan	コワン	
108	guang	コワン	
109	gui	コイ	
110	gun	クン	※
111	guo	クオ	※
112	ha	ハー	※
113	hai	ハイ	
114	han	ハン	
115	hang	ハン	
116	hao	ハオ	
117	he	ホー	
118	hei	ヘイ	
119	hen	ヘン	※
120	heng	ホン	
121	hong	ホン	

122	hou	ホウ	
123	hu	フー	
124	hua	ホワ	
125	huai	ホワイ	
126	huan	ホワン	※
127	huang	ホワン	
128	hui	ホイ	
129	hun	フン	
130	huo	フオ	※
131	ji	チー	
132	jia	チヤ	
133	jian	チエン	
134	jiang	チヤン	
135	jiao	チヤオ	
136	jie	チエ	※
137	jin	チン	
138	jing	チン	
139	jiong	チュン	※
140	jiu	チウ	
141	ju	チュイ	※
142	juan	チュワン	※
143	jue	チュエ	※
144	jun	ジュン	※
145	ka	カー	※
146	kai	カイ	

147	kan	カン	※
148	kang	カン	
149	kao	カオ	※
150	ke	コー	※
151	kei	ケイ	※
152	ken	ケン	※
153	keng	コン	※
154	kong	コン	※
155	kou	コウ	
156	ku	ク	クーとすべし
157	kua	コワ	※
158	kuai	コワイ	※
159	kuan	コワン	※
160	kuang	コワン	
161	kui	コイ	※
162	kun	クン	
163	kuo	クオ	※
164	la	ラー	※
165	lai	ライ	
166	lan	ラン	
167	lang	ラン	
168	lao	ラオ	
169	le	ロー	
170	lei	レイ	
171	leng	ロン	

172	li	リー	
173	lia	リヤ	※
174	lian	リエン	
175	liang	リヤン	
176	liao	リヤオ	
177	lie	レー	※
178	lin	リン	
179	ling	リン	
180	liu	リウ	
181	lo	ロー	※
182	long	ロン	
183	lou	ロウ	※
184	lu	ルー	
185	lü	リュイ	
186	luan	ロワン	
187	lue	リュエ	
188	lun	ルン	
189	luo	ルオ	
190	m	ム	※
191	ma	マー	
192	mai	マイ	※
193	man	マン	
194	mang	マン	※
195	mao	マオ	
196	me	モー	※

197	mei	メイ	
198	men	メン	
199	meng	モン	※
200	mi	ミー	
201	mian	ミアン	
202	miao	ミヤオ	
203	mie	ミー	※
204	min	ミン	
205	ming	ミン	
206	miu	ミウ	※
207	mo	モウ	モーとすべし
208	mou	モウ	
209	mu	ムー	
210	n	ン	※
211	na	ナー	※
212	nai	ナイ	※
213	nan	ナン	
214	nang	ナン	※
215	nao	ナオ	※
216	ne	ノー	※
217	nei	ネイ	
218	nen	ネン	
219	neng	ノン	※
220	ni	ニー	※
221	nian	ニエン	※

222	niang	ニヤン	
223	niao	ニャオ	※
224	nie	ネー	※
225	nin	ニン	※
226	ning	ニン	
227	niu	ニウ	
228	nong	ノン	
229	nou	ノウ	※
230	nu	ヌー	※
231	nü	ニユイ	※
232	nuan	ノウン	※
233	nüe	ニユエ	※
234	nuo	ヌオ	※
235	o	オー	※
236	ou	オウ	※
237	pa	パー	※
238	pai	パイ	※
239	pan	パン	
240	pang	パン	※
241	pao	パオ	※
242	pei	ペイ	※
243	pen	ペン	※
244	peng	ポン	
245	pi	ピー	※
246	pian	ピエン	※

247	piao	ピャオ	
248	pie	ペー	※
249	pin	ピン	※
250	ping	ピン	
251	po	ポー	
252	pou	ポウ	※
253	pu	プー	
254	qi	チー	
255	qia	チャ	※
256	qian	チエン	
257	qiang	チアン	
258	qiao	チャオ	
259	qie	チエ	※
260	qin	チン	
261	qing	チン	
262	qiong	チュン	
263	qiu	チウ	
264	qu	チュイ	
265	quan	チュワン	
266	que	チュエ	※
267	qun	チュン	※
268	ran	ラン	※
269	rang	ラン	※
270	rao	ラオ	
271	re	ロー	※

272	ren	レン	
273	reng	ロン	※
274	ri	リー	
275	rong	ロン	
276	rou	ロウ	
277	ru	ルー	
278	ruan	ロワン	※
279	rui	ロイ	
280	run	ルン	※
281	ruo	ルオ	
282	sa	サー	※
283	sai	サイ	※
284	san	サン	
285	sang	サン	
286	sao	サオ	※
287	se	ソー	※
288	sen	セン	※
289	seng	ソン	※
290	sha	シャ	
291	shai	シャイ	※
292	shan	シャン	
293	shang	シャン	
294	shao	シャオ	
295	she	シェー	※
296	shai	シェイ	※

297	shen	シェン	
298	sheng	ション	
299	shi	シー	
300	shou	ショウ	※
301	shu	シュー	
302	shua	ショワ	※
303	shuai	ショワイ	※
304	shuan	ショワン	※
305	shuang	ショワン	
306	shui	ショイ	
307	shun	シュン	
308	shuo	シュオ	
309	si	シー	
310	song	ソン	
311	sou	ソウ	※
312	su	スー	
313	suan	ソワン	※
314	sui	ソイ	
315	sun	スン	※
316	suo	スオ	※
317	ta	ター	※
318	tai	タイ	
319	tan	タン	
320	tang	タン	
321	tao	タオ	

322	te	トー	
323	teng	トン	※
324	ti	タイ	※
325	tian	テン	
326	tiao	テアオ	※
327	tie	テー	
328	ting	チン	
329	tong	トン	
330	tou	トウ	
331	tu	ツー	
332	tuan	トワン	※
333	tui	トイ	※
334	tun	トン	
335	tuo	トー	※ もしくはトウオ
336	wa	ワー	
337	wai	ワイ	※
338	wan	ワン	
339	wang	ワン	※
340	wei	ウェイ	
341	wen	ウェン	
342	weng	ウェン	
343	wo	ウオ	
344	wu	ウー	
345	xi	シー	
346	xia	シャ	

347	xian	シェン	
348	xiang	シャン	
349	xiao	シャオ	
350	xie	シェ	※
351	xin	シン	
352	xing	シン	
353	xiong	シュン	
354	xiu	シウ	
355	xu	シュイ	
356	xuan	シュワン	
357	xue	シュエ	
358	xun	シュン	
359	ya	ヤー	
360	yai	ヤイ	※
361	yan	イエン	
362	yang	ヤン	
363	yao	ヤオ	※
364	ye	イエ	
365	yi	イー	
366	yin	イン	
367	ying	イン	
368	yo	ヨー	※
369	yong	ヨン	
370	you	ユー	
371	yu	ユイ	

372	yuan	ユワン	
373	yue	ユエ	
374	yun	ユン	
375	za	ツァー	
376	zai	ツァイ	※
377	zan	ツァン	※
378	zang	ツァン	※
379	zao	ツァオ	
380	ze	ツァー	
381	zei	ツェイ	※
382	zen	ツェン	※
383	zeng	ツェン	※
384	zha	ツァー	チャーとずべし
385	zhai	チャイ	
386	zhan	チャン	
387	zhang	チャン	
388	zhao	チャオ	
389	zhe	チャー	
390	zhei	チェイ	※
391	zhen	チェン	
392	zheng	チェン	
393	zhi	チー	
394	zhong	チュン	
395	zhou	チュウ	
396	zhu	チュー	

397	zhua	チュワ	※
398	zhuai	チュワイ	※
399	zhuān	チュワン	※
400	zhuang	チュワン	
401	zhui	チュイ	※
402	zhun	チュン	※
403	zhuo	チュオ	
404	zi	ツー	
405	zong	ツオン	※
406	zou	ツォウ	※
407	zu	ツー	
408	zuan	ツォワン	※
409	zui	ツォイ	
410	zun	ツン	
411	zuo	ツォ	